

紙面法話

年忌法要



▲藤田智さん

一昨年春、十三日講の副組長を命じられてから早2年になろうとしています。

任命される前から、新型コロナウイルス感染が世界や国内で増え始めて日常が一変したことは皆さまもご周知のとおりです。この二年間はコロナウイルスに振り回されました。感染防止のために人が集まらないよう

に、地区や老人会の行事も中止となり、員弁組内やお寺の行事も以前のように行えなくなりました。

葬儀式は、家族と親族のみでひっそりと執り行われ、隣の家の方も知らなかったと聞くこともあるようです。

自坊の行事も、当初は中止を余儀なくされ、ようやくお勤めはできるものの食事については以前のように皆で食べることを自粛しています。

員弁組内の住職さんにお伺いしますと、「ご家庭での報恩講や年忌法要をお参りされるのが減っています」と困惑顔で話されます。

ご家庭での仏事でも、親戚に来てもらえない状況で、家族だけでの仏事を行うご家庭が多いようです。早く以前のように故人と縁のある方々集まって、ともにお念仏ができるようになりたいものです。しかし、「さっぱりしてええやん」「わずらわしくない方が楽でええ」など現状を受け入れる意見もありますので、今後の仏事の在り方には組内住職も苦慮しています。

お父さんを若くして往生されたご家庭で3回忌のお勤めがありました。まだ幼い二人の娘さんとお母さんと両親だけの3回忌でした。お勤めが終わってお茶をいただいていると、娘さんの一人が、「お父さんのお参りは

もう終わったの？」と聞いてきました。

今日のお参りは終わったことを娘さんに伝えると、「つぎのお父さんのお参りはいつ？」との問いに、今度は7回忌だから4年後と言うと、「わたしが〇年生になった時にお父さんに会えるんや」と姉妹ではしゃいでいました。

「そのつぎは？」との問いに13回忌で7回忌から6年後と伝えると娘さんが幾つになっているか考えていました。おじいさんが50回忌までであることを話して、「わしはその頃までには息子のところに逝ってるわ」のことは、娘さんが「じゃあ、50年先までお父さんと逢えるし、おじいちゃんとも逢うことができるんや」とのことばに、あらためて年忌をお迎えするところの持ち様を覚えてもらえたひとときでした。

組内の多くのお寺でも同じと思いますが、自坊で案内している年忌法要は、1周忌・3回忌・7回忌・13・17・23・27・33・37・43・47・50回忌をお勤めすることです。

「33回忌で終わりでもいいと聞いた」「7回忌まででいいんでしょ？」などいろいろなことを世間ではとびかっているようですが、そのほとんどは間違いでしょう。

浄土真宗では『亡くなった方を縁として、法縁に会うための法要です』。その回忌、その回忌に、故人を偲びながら、ともに阿弥陀如来のお慈悲のなかに包まれている感謝の思いでお勤めをすることが大切なことです。

また、私のいのちがその回忌まで生かされた思いを抱かれることも大切なことです。ですから50回忌を何年も早くお参りするといったことは、その意味を無くすことになってしまいます。

人が集まれないことは仏事には大きな打撃となっています。ご家庭でもお寺でも、人がいてこそその仏事であることを思い知らされました。その反面、以前より身近な人だけでの仏事となっているからこそ気軽に聞くことができるし、話せることがあります。

普段では話さない思いや感情を、阿弥陀さんの前だからこそ話せる仏事の時をお迎えください。こんな時だからこそ仏事でこころを潤していただきたいものです。

十三日講講長 藤田智（蓮成寺）

寺院紹介 教楽寺

一説によれば教楽寺の開基は、行基といわれています。

慶雲元年(704年)、全国的に飢饉や疫病などの影響により社会不安が高まる中、名僧行基が諸国を行脚していました。偶然この地に来られた時、光明を発する樟の大樹に出会い、行基は早速その樟の木の一枝を切って阿弥陀仏を刻み、堂を立てて安置しました。そして次の詠歌を読んだとされています。

『茂留謂美津、片樋天登遠世登、教留遠、聞天耕寸、民曾楽武』

(もるいみづ、かたひでとをせと、おしふるを、ききてたがやす、たみぞたのしむ)

この詠歌は灌漑(かんがい)の方法を教え、開墾農耕を勧める歌とされています。この詠歌の中から「教」と「楽」の二字をとり「教楽寺」と命名され、また



▲本堂

「片樋」という地名もここからうまれました。

行基が教楽寺を開いた際は法相宗でしたが、その後天台宗、真言宗と転派し、宝徳元年(1449)二十五代目僧善智の時、蓮如上人のお導きにより浄土真宗となりました。

当寺には真宗寺院としては珍しく、十一面観音と不動明王が安置されています。

この辺りには奈良時代から平安時代にかけて神仏習合の思想から神宮寺が建てられていましたが永禄年間、織田信長の兵火により焼失しました。幸いにも十一面観音と不動明王は消失を逃れ、片樋区の申し出により大正十年より教楽寺に安置され、毎年、観音前でお勤めがおこなわれます。妊婦が詣ると難産しないといわれ、一名を「子安の観音」とも言います。今も人づてに観音様を探され、遠方より参詣される方々がおみえになります。員弁郡最古の仏像ともいわれ、この時代の貴重な文化財でもあります。



▲行基歌碑

教楽寺を訪れていただいた際は、ご本尊の阿弥陀如来様はもちろん、ぜひ観音様、不動明王様にもお会いになって下さい。

原稿を書くにあたり当寺の史料は消失、先代もおらず不明なことばかり。唯一先代の本棚に残された古い書籍文献を紐解きました。教楽寺にとって貴重な機会となりました。



▲不動明王



▲十一面観音

参考・引用文献『東海の蓮如さん』『員弁郡略史』『員弁史談』『大安町史』『片樋の歩み』 木村祐邦 (大安町片樋 教楽寺)